



TITLE:

ご挨拶

AUTHOR(S):

高村, 仁一

CITATION:

高村, 仁一. ご挨拶. 静脩 1982, 19(1): 1-2

ISSUE DATE:

1982-04

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/36900>

RIGHT:



静脩

1982年4月

The Kyoto University Library Bulletin

Vol. 19, No. 1

ご挨拶

高村 仁 一

このたび、はからずも附属図書館長に選出され4月1日に就任いたしました。前館長の林 良平先生は、館長として9年間にわたり、本学附属図書館の画期的な発展と充実に尽くされるとともにわが国の大学図書館行政に多大の貢献をなされました。その後を引き継ぐ責任の重さを痛感するものでありますが、輝やかしい伝統を誇る本学の学術研究に対して、附属図書館の果たすべき支援機能を一層高めよう、図書館職員とともに、微力ながら努力いたす所存でありますので、前館長同様、よろしくご鞭撻ご教示を賜われますようお願いいたします。

ご承知のように、総長はじめ関係各位のご尽力により、附属図書館の新館が文部省によって認められ、ただいま工事が進行中であります。新館図書館の基本構想および建築計画の概要についてはさきの『静脩』号外（1981年6月、1982年1月）に示されているように、従来の学習図書館、総合図書館としての機能をさらに充実し、新しい時代に適応した図書館づくりを目指したものであります。これを本学のメイン ライブラリーとして立派に整備することが、当面の大きな仕事であります。同時に、何よりも大切なことは、この図書館が、本学の教育、研究に対する支援機構として

いかに利用者各位の多面的要請に添えていくか、運営の具体化こそ最大の課題であろうかと考えております。

本学の図書館は、附属図書館（中央図書館）と55の部局図書館（室）から成り、全学の蔵書数は400万冊を超える全国屈指の図書館システムであり、最近では年々10万冊の増加をみるに至っております。各部局の図書館（室）は、その部局の特質に応じた自主的な運営を確保しつつ、附属図書館を中心とした全学的な協力体制を形成しているのが実際の姿であります。このような図書館システムのもとで、新しい図書館としては、まず、全学の学生を対象とした学習図書館としての勉学の環境づくりが大切であることは申すまでもありませんが、これまで以上に整備を必要とすることの一つは附属図書館新館の基本方針（『静脩』号外

1981年6月）にもありますように、近年における学術情報量の飛躍的増大に伴ない、全学的な視野に立って、研究図書館としての機能の充実をはかることであると考えております。このことに関して附属図書館が、各部局図書館（室）の独自性を尊重しつつ、全学的な有機的連繋の一層の緊密化に向けて連絡、調整をはかり、かつ、資源共有の理念に留意しつつ、地域および全国的規模の学

術情報システムにおける役割をも念頭において、図書館活動の活発化を促すことによって、本学の学術研究の進展に対して貢献しうることを念願しております。さらに、図書館資料の著しい増加に伴って各部局の要望に応じて保存図書館としての役割を果たすことも、新図書館に期待されているのが現状であります。

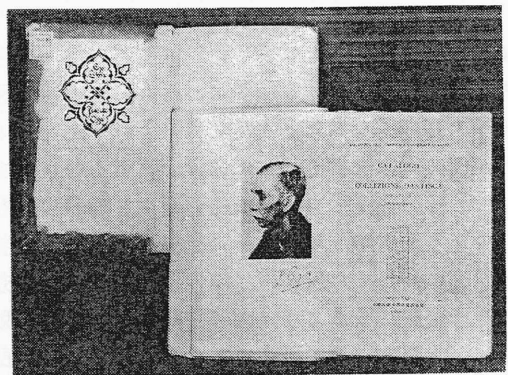
しかし、これらのことを具体的に、どのように実現していくか。道は決して容易なことではあり

ません。図書館システムの活動は、全学の教育・研究に深くかかわり合いをもち、各学問分野と相互に連繋し合うものでありますだけに、全学的な意志の反映のもとに、鮮明な図書館像の実現を目指して努力を重ねたいと思います。ここに重ねて図書館の整備充実、運営ならびに日常活動に対する各位の深いご理解とご協力、ご支援を心からお願いするものであります。

詩聖ダンテに魅せられた明治人の コレクション：旭江文庫

文学部図書室 村 橋 ル チ ア

イタリアの詩人 Dante Alighieri (1265-1321) の著作は各国語に翻訳されているが特に代表作“La Divina Commedia”(神曲)、“La Vita Nuova”(新生)などは古くから多くの人々に親しまれている。したがってその分野の研究者も数多くなっている。そして欧米には立派なダンテ・コレクションを所蔵している図書館があつて中でもコーネル大学のものは特に有名であるが、幸い京都大学にも戦前からすばらしいダンテ・コレクション：旭江文庫が備えられている。それは大賀寿吉氏(明治3年—昭和12年
1870—1937)がダンテ研究への絶大な情熱と努力をもって生涯を通して収集された愛蔵書である。大賀氏の号は出身地である岡山の旭川に因んだ「旭江」であつたため、このコレクションも「旭江文庫」と名付けられている。敬虔なクリスチャン(プロテスタント)で非常に英語の堪能な方だったと云われる大賀氏は、武田製薬株式会社(大阪)に勤務され、多忙な日常にもかかわらずダンテ研究へのたゆまぬ意欲を抱き続けてその当時の京大文学部教官(新村出、厨川白村、浜田青陵、黒田正利等)と親交を結び伊太利亜会(大正8年12月発会)その他で、「中世紀とダンテ」、「ダンテとシェークスピア」、「ダンテとシェークスピアの人生観に付て」など講演もされたようである。また京都文学会編「芸文」、京大英文学会編



大賀寿吉氏とそのエクス・リブリス

「ミューズ」その他の雑誌にも寄稿されている。ダンテ学者山川丙三郎氏(明治9年—昭和22年
1876—1947)とも親しく文通していられたがその手紙を編集した「大賀寿吉氏の書簡」(イタリア学会誌、3, 7, 8, 11, 15号)によって当時のダンテ文献収集と研究につくされたご苦労のほどがよく理解できる。今日のように敏速に海外の情報を得られなかった時代にもかかわらずイタリアをはじめ欧米の学界、図書館、出版界とたえず連繋をとってダンテ文献の情報を集め資料を厳選して蔵書構成の充実をはかられた。そしてただ自分自身の研究のためにだけでなく、日本の若きダンテ研究者の便宜を配慮して